

# B—89 ストレッチ被服の生体におよぼす 2.3 の 影響 (II)

大阪市大

田中 道一  
○弓削 治

1. 本研究は、ストレッチ被服を着用したとき、人体

の各運動に対してどの程度、伸縮自在性を持つか、またある伸びを越えた場合、人体活動を阻害して着用感の不快を生ずるかを、筋電図、呼気量、脈搏などについて検討し、それらにもとづいて最適なストレッチ量をもったストレッチ被服を求めようとした。

2. 試料は、10・30・50・100各%のストレッチ量をもった織物を用い、上肢・下肢の屈伸動作を行ない、そのときに働く代表的な筋肉を選び、屈伸時の筋肉に流れる電流について筋電計を用いて測定した。また呼気量、脈搏についても測定し、非着用の場合と各ストレッチ量の被服の場合と比較検討した。

3. 結果は、筋電図については、試料を着けない筋電流は、最高（最大屈筋）0.8 mV 放電による振幅を繰り返した。ストレッチ被服着用の場合は、ストレッチ量が大きくなるほど、非着用の筋電流に近づく。また呼気量・脈搏も同じ傾向を示した。